高齢社会に向けての男女共同参画学習に関する調査研究

高橋由紀

≪ キーワード ≫

高齢社会、高齢期、向老期、団塊の世代、男女共同参画社会、ジェンダーに敏感な視点、混合型ライフスタイル、学びを通じた自己の変容、学習課題、学習プログラム

≪ 要　旨 ≫

日本社会は、高齢期を長期にわたって体験する人が増え、その移行期にはアイデンティティの再編が必要とされるようになってきた。本研究では、「大人」から「老人」への移行期を「向老期」ととらえ、ライフスタイルを再構築するために重要な時期であると考える。性別や年齢という枠にとらわれずに、個人の選択と自己決定にもとづいて、「豊かな」高齢期を迎えるには、これまでに築き上げてきた人間関係や社会的地位を見直すための学習が必要となる。特に、ジェンダーに敏感な視点から見直すことが、これからの男女共同参画社会にとって重要であると考える。そこで、現在「向老期」に当たる団塊の世代を主な対象として、学習課題を明確化するとともに、男女共同参画社会の形成に資する学習プログラムの開発を目的に調査研究を行った。

はじめに

日本社会の高齢化は急速に進展しており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2015年には国民の4人に1人が65歳以上の高齢者になるという。加えて、少子化の進展が高齢化を促進し、日本の人口構造は変換の時にある。1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定され、急速に変化する社会に対応するためには、男女共同参画社会の実現が「21世紀の我が国社会を決定する最重要課題」であることが示された。

国立女性教育会館では、国際高齢者年にあたる1999（平成11）年から本研究を開始し、2002（平成14）年の3月まで、高齢期における豊かなライフスタイルの実現に向けた男女共同参画学習を進めるために調査研究を行った。

1. 研究の目的

戦後の経済成長を背景に、結婚適齢期に結婚し、女性は主婦になり、男性は被雇用者として一家の経済の柱となり、平均2人の子どもを持つというライフコースを多くの人が経験する時代が続き、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が大衆化した。1980年代以降は、少子化、晩婚化、未婚化、離婚増加が社会現象として表れ、個々人のライフコースは多様化したかのようにみえる。しかし、性別役割分業は根強く存在し、多様化したとはいえ男性は男性、女性は女性というジェンダーにそったライフコースをそれぞれに歩み、本来的な意味での多様なライフスタイルの選択がせばめられている。

このような状況において、高齢期の豊かでかつ多様なライフスタイルのモデルをいかに提示しうるのかということが本研究の課題であった。この研究で使う「豊かさ」とは、経済的な豊かさというよりはむしろ、精神的な豊かさ、人と人とのつながりの豊かさを意味する。また、「多様な」ライフスタイルとは、性別と年

齢にとらわれずに、個人の選択と自己決定にもとづいて形成されたライフスタイルのことを指す。

高齢期は、個人の生活条件や社会的地位が大きく変わる時期であり、それまでの人生で築き上げてきた人間関係や社会的地位を見直す契機である。そのための学習、特にジェンダー（社会的・文化的に形成された性別概念）に敏感な視点からライフスタイルを見直し、学びを通じた自己の変容が豊かな高齢期を迎えるために重要であると考える。そこで本研究では、ライフスタイル再編のための学習課題を明確化するとともに、学習課題にそったプログラムの開発を行うことを研究の目的とした（図1参照）。

2. 研究経過

初年度である1999（平成11）年度には、以下のようなテーマに関わる先行研究を検討した。また、一部のテーマについてはアンケート調査とヒアリング調査を行った。

ア．教育老年学におけるジェンダーの問題
イ．高齢者福祉におけるジェンダーの問題
ウ．中高年世代（団塊の世代を中心に）のジェンダー問題に関する実態と意識
エ．中高年企業人の高齢期における仕事と家事・介護への参画に向けた学習プログラム開発
オ．高齢者問題に関する学習プログラムの事例研究およびプログラム開発
カ．高齢期における女性の社会参画（特に市民活動）能力育成のためのプログラム開発
キ．高齢社会にむけての家族コミュニケーション能力の学習プログラム開発

2000（平成12）年度は、研究結果をまとめ、報告書『高齢社会に向けての男女共同参画学習——豊かな高齢期を迎えるために——』（2001年3月）を作成した。また既存の学習プログラムを収集しその検討を行った。

2001（平成13）年度は、これまでの研究によって明確化された学習課題にしたがって学習プログラムを開発し、より多くの人に活用されるようにと考え、ブックレット『男女共同参画、向老期をともに生き、ともに学ぶ——豊かな高齢社会に向けて』（ヌエック・ブックレット1、2002年3月、財務省印刷局発行）を刊行した。

3. 研究メンバー

本研究は、様々な分野のメンバーからなる学際的な研究であるが、ジェンダーに敏感な視点から分析・考察するという姿勢を共有しつつ共同研究を行った。

安達　正嗣　名古屋市立大学助教授（家族社会学・コミュニケーション論）
新井　茂光　デイセンターさくらセンター長（高齢者福祉）
内山　早苗　株式会社ユーディージャパン代表取締役・高齢社会を生き抜く人づくり塾主宰（ビジネス教育・生涯教育）
葛原　生子　広島大学大学院（成人教育）
堀　　薫夫　大阪教育大学助教授（教育老年学・生涯学習論）
伊藤眞知子　東北公益文科大学助教授（女性学・社会学）
高橋　由紀　国立女性教育会館事業課研究員（ジェンダー論・文化人類学）

4. 研究対象

社会の高齢化・長寿化に伴い、高齢期といわれる時期を長期にわたって体験する人が増加し、その移行期におけるアイデンティティの再編が注目されるようになってきた。本研究では、「大人」から「老人」への移行期を「向老期」と考え、現在この時期に相当する団塊の世代（1947年～1949年のベビー・ブームの時期に生まれた世代）を主たる研究の対象とした。

団塊の世代は、戦後民主主義や男女平等教育を受け、学園紛争やフェミニズム運動を経験した世代である。他方、経済の安定成長期を支え、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業に基づいて家族を形成してきた世代でもある。人口学的に大きな比率を占める団塊の世代が、ジェンダーに敏感な視点によって自らの人生や価値観を見直し、ライフスタイルを再構築することは、今後の高齢社会のゆくえにも関連する重要な点である。

5. 報告書『高齢社会に向けての男女共同参画学習——豊かな高齢期を迎えるために——』の作成

研究メンバーのそれぞれの専門分野から、向老期における課題を検討し、その成果を報告書としてまとめた。

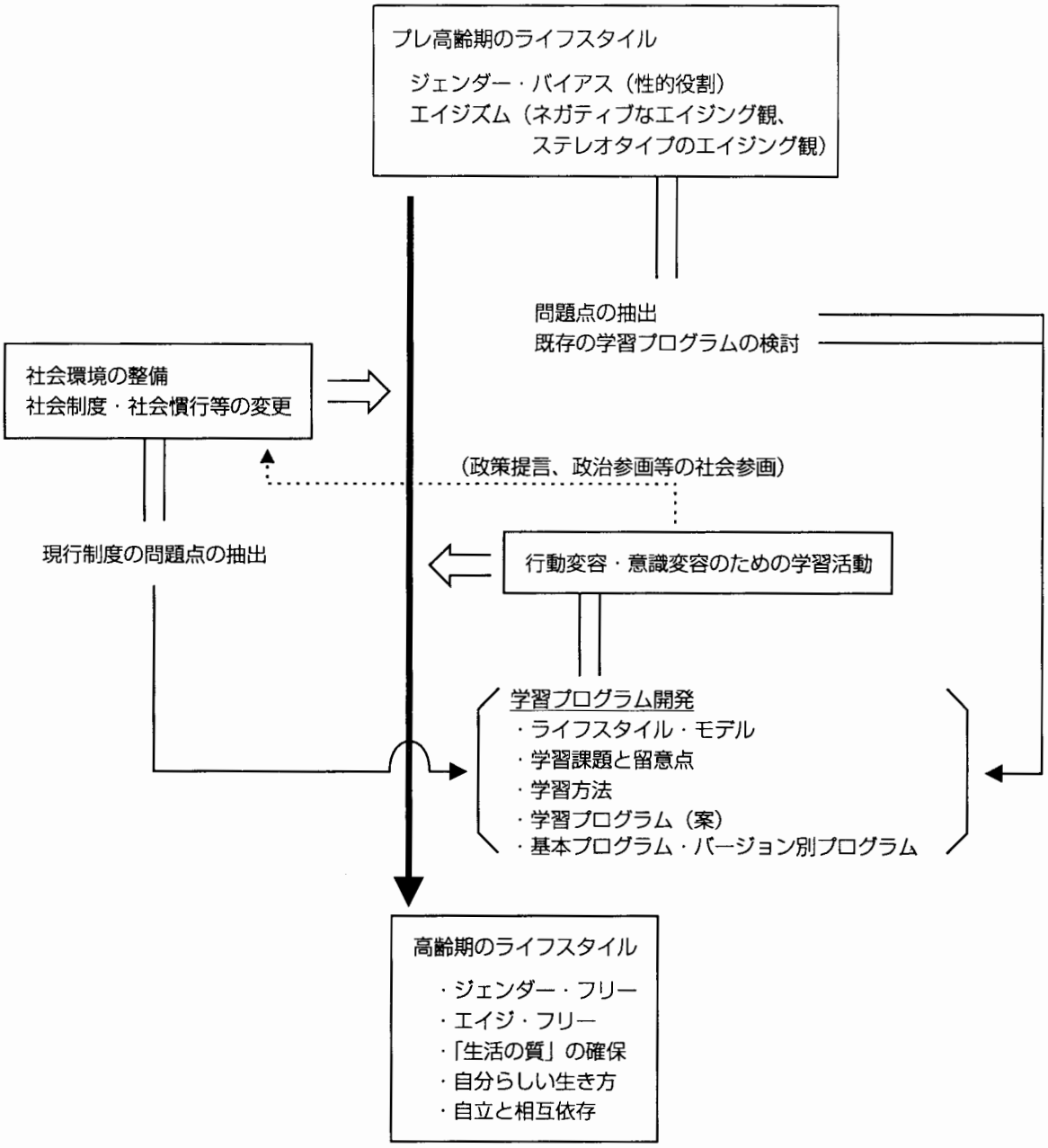

図1　「高齢社会に向けての男女共同参画学習に関する調査研究」関連図

堀は、教育老年学関連の調査研究データをジェンダーの視点から分析し、女性の方が男性よりも老いや高齢期へのポジティブなイメージを持っていること、50歳代あたりで老後への意識は男女で似てくるが、男性は血縁の援助を期待し、女性はよりはば広い援助の可能性を考える傾向にあることを明らかにしている。また、高齢者の学習要求・学習行動では、男性は社会的・教養的学習を志向し、女性は人間関係関連の学習を志向する傾向にあることを指摘している。

新井は、現在介護を担っている男女を対象とした聞き取り調査の事例や、要介護者と介護者のそれぞれの現状を概観し、女性が家事と介護の二重負担を余儀なくされていること、性別役割分業意識は男女双方に存在すること、女性のライフコースを決定する因子として介護の影響が大きいことを明らかにしている。介護の負担を軽減するためには、介護技術や介護サービスの利用法を学習し、現実にのしかかってくる負担を軽減すること、さらには家庭負担を軽減するために、介

護を社会的なものとして把握する視点の獲得が重要であることを指摘している。

葛原は、地域における社会活動（市民活動）の担い手としての女性リーダー育成の重要性に着目し、NPO法人を対象とした調査および女性リーダーへの聞き取り調査を行っている。そして、女性が理事長を務めるNPO法人は女性役員や女性の職員比率が高いこと、男性が理事長を務めるNPO法人は男性役員が多いというようにジェンダーによる二極化が見られることを明らかにしている。さらに、男性優位の組織運営の中で女性の意思決定への参画を進めるためには女性リーダー育成プログラムが必要不可欠であるとして、プログラム開発のポイントを挙げている。

安達は、高齢社会にもとめられる家族・親族コミュニケーション能力の学習プログラムの開発に向けて、愛知県にあるニュータウンに住む高齢者への面接調査結果から得られた知見にもとづいて考察している。そして、子どものいない夫婦の方が高齢期の夫婦関係を比較的スムーズにすすめられること、夫の定年退職後の生活をいかに再構築するかが夫婦関係の再構築とかかわること、女性にとっては社会活動が生きる活力を与えていること、三世代同居では、世代間の情報の共有および経済的ルールの明確化が重要であることなどをあきらかにしている。

内山は、40歳以上の企業人を対象に「高齢社会に向けての男女共同参画学習に関する企業人調査」というアンケートを実施し、その結果をもとに、性別役割分業意識は仕事上では以前に比べて少なくなっているものの、「お茶くみは女性」という生活意識や家庭での意識の部分ではまだジェンダー意識が残っていること、「女性は弱いもの、強い男性が保護するのは当然」という「男性の間違った優しさ」が根強くあること、家庭内での性別役割分業意識が男性の自立を阻み、仕事上の性別役割分業を当然視する考えに関連していることを指摘している。

伊藤は、総論としてこの研究の背景となる社会状況を分析し、ライフコースが多様化する一方で「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業がかつてないほど進展したこと、それゆえ現在向老期をむかえている団塊の世代にとって、他者との共同による参加型・体験型学習を通じた自己の変容が重要であることを指摘している。その際に学習目標となるのは、1. ジェンダーに敏感な視点の獲得と深化、2. 自立をふまえた相互扶助ないし相互依存、3. 老いや高齢期へのポジティブなイメージの醸成の3点を挙げている。

6. 向老期における学習課題

本研究を通じて明確になった学習課題は、（1）人間関係の再構築、（2）多様な活動への男女共同参画、（3）混合型ライフスタイルの形成、（4）介護への男性の参画、に大別される。

（1） 人間関係の再構築

職業人として生きてきた人にとっては、定年や引退という転機を迎えるに当たり、「職場人の人間関係から生活人としての人間関係へ」の移行が大きな課題となる。それは「タテの人間関係からヨコの人間関係へ」の変化という意味を含んでいる。また、「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業にもとづいて生活してきた人にとっては、定年をきっかけとして夫婦関係の再編という課題にも直面する。

社会的な位置づけの変化は、夫婦関係のみならず、親子関係やきょうだい、孫との関係などの家族関係にも影響をおよぼす。家族関係はプライベートなものとして他者と共有することが難しい側面があるが、学習を通じて他者と問題を共有したり、自分の家族を客観的に相対化して見ることができる。

さらに、人間関係の見直しの際にポイントとなるのは、言葉とコミュニケーションにおけるジェンダー・バイアスを意識化することである。普段何気なく使っている言葉のなかに、ジェンダーを固定化したり、他者を不快にさせる言葉があるかもしれないということを意識し、人権尊重の観点から言葉や他者とのコミュニケーションを見直すことも課題の一つである。

（2） 多様な活動への男女共同参画

向老期は社会的地位と役割の移行期であり、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業から解放され、男女がともに自らの意思に基づいてあらゆる分野に参画する可能性を開くためには重要な時期である。

向老期からどのように働いていくのか、これまで仕事一筋だった男性の場合には、家庭生活にどのように参画していくのかを模索することが課題となるだろうし、また男女ともに、市民活動・NPOへの参画や生涯学習への取組みなど、新しい活動へと視野を広げていくことが課題となる。

（3） 混合型ライフスタイルの形成

向老期に至るまで仕事中心、あるいは家庭中心という単線型のライフコースをたどってきた人が、多様な活動に参画し様々な役割を引き受けるという混合型ライフプランを計画し実践することは、人生の幅を広げ高齢期における豊かな生き方を実現する一つの方策である。性別役割分業にもとづいて生活してきた夫婦の場合には、男性が積極的に家庭役割を引き受けること、またそれを促進するように女性が家庭役割を独占しないことも必要であろう。その人独自の混合型のライフプランを立てることは、女性も男性もジェンダーの枠にしばられず多様な役割を担っていこうとすることにつながり、生活のあらゆる面で自立する力をつけることへとつながっていく。

（4）介護への男性の参画

高齢期を考える際に、最も重い課題となってくるのは介護である。従来の介護は家庭内で女性を担い手としてきたが、これからの超高齢化社会では、男性の介護への参画を促進し、男女がともに介護の担い手として主体的に介護に関わることが求められている。

さらに、介護を主として家庭内で行うものと考えるのではなく、介護に対する社会的支援の充実もまた求められている。よりよい介護サービスを受けるために介護経験者が連携し、「介護オンブズパーソン」として施設や社会制度の改善に働きかけることも必要である。

男女が主体的な介護者となるためには、学習を通じたエンパワーメント（力をつけること）が重要となってくる。

7. ブックレットの作成

以上のような「向老期」の学習課題をより多くの人に示し、その解決に資することを目的として学習プログラムを開発し、多彩なプログラム例を掲載したブックレットを刊行した。「ジェンダーに敏感な視点」から生活を見直し、参加型の学習ができるようにと考え、学習課題を以下のような12のテーマに分け、テーマごとに学習プログラム例と活用方法の解説を掲載している。

テーマ1 人間関係と交流

プログラム例1　タテの人間関係からヨコの人間関係へ

プログラム例2　向老期における夫婦関係

テーマ2 家族関係

プログラム例　高齢期に向けての家族コミュニケーションの学習

テーマ3 ライフプラン

プログラム例　混合型ライフプランのすすめ―虹をつかむ

テーマ4 市民活動・NPO

プログラム例　NPOリーダー・エンパワーメント塾

テーマ5 向老期からの働き方

プログラム例　新たな働き方の創造

テーマ6 生涯学習

プログラム例　生涯学習としてのジェンダー問題学習と人間関係の再構築

テーマ7 自由時間

プログラム例　向老期の時間設計術

テーマ8 健康

プログラム例　自分でつくろう向老期の健康

テーマ9 住まい

プログラム例　住まい

テーマ10 介護

プログラム例　介護オンブズパーソン

テーマ11 死と葬送

プログラム例　死と葬送

テーマ12 言葉とコミュニケーション

プログラム例　言葉から考える共生社会のシニアライフ

さらに、このブックレットの中では、参加型学習やワークショップという形式に慣れていない学習者のために、理解を深める話し方・聴き方などの「コミュニケーションの基本」、学習会の準備・実施・実施後の流れを例示した「学習会の組み立て方」、ブックレットに掲載したプログラムを個々人が応用するための「プログラムの展開例」、トライアングル・ディスカッション（三角討議法）・葛藤状況討議法などの「学習会で活用できる学習方法」、学習会で使用する「ワークシートとその活用」といった企画・運営方法に関する情報も掲載している。

おわりに

本研究の成果は、報告書とブックレットの他、2001（平成13）年6月24日に「男女共同参画週間」の記念

事業を当会館において開催した際にシンポジウム「ゆたかな高齢期をつくる——向老期をともに生き、ともに学ぶ」として公開している。その内容は、『国立女性教育会館研究紀要 第5号』に収録されている。

豊かで多様な高齢期に向けて、これまで作り上げてきたライフスタイルを再編するためには、学びを通じた自己の変容が必要とされる。本研究では、参加型の学習やワークショップを意識変容を促す学びのスタイルと考え、そのための学習プログラムの開発を行った。

そして、どのプログラムの場合にも、学習のポイントとして「男女共同参画の視点」という項目を設け、学習者がジェンダーに敏感な視点をもてるよう配慮した。たとえば、「健康」というテーマでは、「身体もジェンダーによって形成されることに気づくことは大切であるが、同時に、男女の違いばかり強調するのではなく、共通点を見いだして対話し話し合うことを重視する」などのように、留意点を盛り込み、どのようにして学習に男女共同参画の視点を入れていったらいいのかがわかりやすいように配慮した。

学習の中で繰り返し考えることを通じて、なじみ深く染み込んだ「男」「女」というジェンダーの区分を見直すことが、夫婦関係などの身近な人間関係を再編し、高齢期を豊かに送るためのライフスタイルの形成につながっていくものと思われる。

（たかはし・ゆき　国立女性教育会館事業課研究員）